

東京帝國大學經濟學部內 東亞經濟研究所

東亞經濟叢論

第貳卷 第貳號

昭和十七年五月

附錄 南方文獻目錄

- | | | | | | | | | |
|----------------------------|-----------------------|-----------------------------|-----------------------|---------------------------|----------------------------|--------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 東亞廣域經濟の爲替理論……………經濟學博士 谷口吉彦 | 貧樂生活及思想……………商學士 大谷孝太郎 | 漢志にあらはれたる貨幣思想……………經濟學士 穗積文雄 | 支那銀行法規考……………經濟學士 德永清行 | 滿洲國興農合作社の組織……………經濟學士 大上末廣 | 印度經濟學の成立とその方向……………經濟學士 島恭彦 | 支那女子紡績勞動者創出過程の特質……………經濟學士 岡部利良 | 中晚唐時代に於ける燉煌地方……………文學博士 那波利貞 | 佛教寺院の礎礎經營に就きて……………文學博士 那波利貞 |
|----------------------------|-----------------------|-----------------------------|-----------------------|---------------------------|----------------------------|--------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|

（禁轉載）

書肆 有斐閣 發賣

貧樂生活及び思想

大谷孝太郎

一 支那人の貧樂生活

支那民族は古い民族である。古い民族の人間として支那人は複雑である。其の複雑であるといふことの一面は支那人が古い民族として多種多様な経験や體驗の堆高い集積の中に生きてゐるといふことである。而も其の堆高き經驗たるや決して枯木死灰ではない。枯木死灰の如く見えるものもよく見れば鑿鑿たるいぶきを持つてゐる。言ひ換へれば、支那人は其の堆高き經驗の一々に生命を附與し、且其の一々から生命を受取つてゐる。然るに、支那人の複雑さは其の生きたる過去の經驗の堆高きことのみではない。其の上に更に新しき生活を積上げつゝあることである。其れは必ずしも支那民族の自己生産にかゝるものではなくして、外より受容する所であるにしても、ともかく、過去の經驗の堆高き集積の上に更に新しき経験を積上げつゝある。従つて、支那人の生活は量に於ても種相に於ても豊富なものとなつてゐる。然るに、其の豊富なる生活は其の餘りの複雑さのために、之に一定の旋律を見出すことが困難である。一定の旋律見えたりと思へば又見失ふ。これこそと一定の旋律を捉へた瞬間に支那人生活の實態は之を逸し去る。如何に眼を凝らし思ひをめぐらしても遂に一定の確たる旋律に到

達し得ないかの如くである。支那人の生活には何等旋律なしとさへ斷じ度い念に驅られる。支那人の生活は漠々として盛り上つてゐる。漠々として何等一定の旋律無きが如くにして有り、有るが如くにして無し。支那人の有つていひ知れぬ生活の迫力はこゝに存する。一定の旋律無きが如くなる點に於ても支那民族を散文的民族 (prose nation) と呼ぶことが出来る。

漠々として盛り上つてゐる迫力ある支那人生活は生命的、經濟的、知的、藝術的、宗教的、社會的、政治的等の生活の諸方向の綜合に成る複合體であつて、これ等諸方向又は諸領域に分析することが出来る。就中、經濟的生活方向は支那人生活力の構成上如何なる姿で如何なる役割を演じてゐるであらうか。支那人生活を分析して其の經濟的生活方向を求め行くに、精神作用諸方向の一としての經濟的精神作用又は經濟精神が問題の中樞をなし、不可分の之にまつはる所の經濟行爲、經濟原則、經濟技術、經濟の社會的組織、經濟政治等に問題は及ぶであらう。而して、根柢は物的福祉なり財の效用價値に對する根本的な評價態度、財利富力なるものに對する根本的な評價態度、結局經濟を繞る世界觀の如何に存する。經濟的生活領域の根柢である所の此の經濟を繞る世界觀を窺ふに、支那人には貧樂の世界觀が胸底深く存し、其の經濟生活は貧樂的な色調を帯びてゐる様に觀ぜられる。貧樂的生活が支那人經濟生活の基調である様に思はれる。

史記の記す所に從へば、神農以前はいざ知らず、「詩書ニ述ブル所ノ虞夏以來ノ若キニ至ツテハ、耳目ハ聲色ノ好ヲ極メント欲シ、口ハ芻豢ノ味ヲ窮メント欲シ、身ハ逸樂ニ安ンジテ、心ハ勢能ノ榮ニ誇矜ス。俗ノ民ヲ漸セシムル久シ。戸ニ説クニ眇論ヲ以テスト雖モ終ニ化スル能ハズ」といふ有様であり、「天下熙熙トシテ、皆利

ノ爲ニ來リ、天下壤壤トシテ、皆利ノ爲ニ往ク」世情であり、秦漢の頃、僮僕千人に至り田池射獵の楽しみ人君に擬し、馬千匹、牛二千頭、羊一萬頭、粟萬鐘を以て數へる程の富豪が現れ（史記貨殖列傳）、秦が商鞅の法を用ひて井田を廢し、民賣買し得るや、富者田阡陌を連ね、貧者立錫の地亡き有様となる程（漢書食貨志）、古くより致富の盛んなるものがあつた。後代に於ても富が求められ金錢が愛せられることに、何等の渙りなく今日に至つてゐる。時世を諷刺したものではあるが、東晉の魯褒の錢神論を通じて觀れば、魏晉南北朝時代に於て既に錢は世の神寶として珍重せられ、人皆これに親しむこと兄に對するが如く、嚴毅なる人の顔をもこれを以てすれば笑顔をらしめ得べく、發き難い口をもこれを以てすれば言はしめ得、これを多く有する人は何れの方面如何なる環境に於ても人の前に處ることが出來、その少い人は常に人の後に居らしめられ、官が尊くなり名の顯れるのは皆錢の力の致さしめることで、錢を以てすれば危きことも安からしむべく、死せむとする者も活かしむべく、貴者をも賤しからしむべく、生者をも殺さしむることが出來、忿爭も錢を以てするに非ざれば勝ち得ず、幽滯も錢を以てするに非ざれば抜けず、怨讐も錢を以てするに非ざれば解けず、令閥も錢を以てするに非ざれば發かず、洛中朱衣の徒・政界要路の士人皆錢を愛惜して、已むこと無く、錢を抱いて終始し、如何に學問人物に於て秀でた適材なりとも、錢なくして立身出世を望むは、譬へば鳥が翼を藏して飛躍せむと欲し、獸が足無くして行かむと欲するが如きものであつて、當時の俚諺にも、錢は耳無けれども鬼神を使役することが出來ると謂はれたらしい。わが國で「地獄の沙汰も、かね次第」とはいつ頃から言はれたことか、支那では元代に「有錢可以通神」といふ俚諺が行はれたやうである。「衙門（裁判所）に來るなら金持つて來い」といふ意味の言ひ草も現存する。古來支那人の最

大の願は福・祿・壽而して爵といふ現世的福祉であるといはれ、西洋館に住み、日本婦人を妻とし、支那料理を食ふのが今の支那人の三願であるとは人々の聞き飽きてゐることである。猷太人にまさるとも劣らぬ守銭奴としての支那人、拜金宗徒としての支那人、商人としての支那人、經濟人としての支那人、經濟的技術人としての支那人、而して享樂主義者としての支那人に就いては最早語り盡されてゐる。蔣と宋家一統の致富のための抗戰建國といふが如きに至つては其の最も生々しきものである。支那人といへば、利ある所すなはち就き、喰はすに利を以てすれば則ち跟いて來る人間であると信じてしまつて、之を一箇の公理かの如く心得てゐる人は少くないであらう。げに、支那人が現世的物的福祉を重んずるや切なるものがある。彼の世界觀に於て財利富力は誠に高き評價を受けてゐる。支那人は經濟人であるとか、小經濟人であるといふ觀方は全くの見當外れではない。

然しながら、支那人が經濟的價值——正確には生命的經濟的價值——以上に重んずる價值領域は果して存しないであらうか。經濟的價值は支那人の世界觀に於て「これこそは離されぬ」といふ無上至高の地位を保つてゐるであらうか。支那人が經濟的價值以上に重んずる價值領域が存する。經濟的價值は支那人の世界觀に於て決して無上至高の地位を保つてゐない。一見、支那人は經濟的價值を無上至高として他の諸價值を之に下屬せしめ、一應經濟的價值にし、がみついて「これこそは離されぬ」といふ經濟人的態度を取るが、窮極的には經濟的價值を超越して他の價值に轉轍し、經濟的價值を却つて之に下屬せしめ、又は經濟的價值を弊履の如く抛つてではあるまいか。

支那人は經濟的價值を重んずるには重んずるけれども、其れ以上に重んずるものがある。其れは生命的社會的

價值又は社會的政治的價值である。生命的社會的價值領域は即ち第一に血縁的、第二に地縁的なる同類の群居である。社會的政治的價值領域は即ち衆望を擔つての勢力、道德的政治（徳治）、愛と指導との政治、一般的にいって、人格の承認であり、社會的地位であり、「面子」である。支那人を士・大夫、讀書人、治者の部類と衆庶、被治者の部類とに分つて、衆庶は生命的社會的價值即ち同類群居と社會的政治的價值即ち衆望を擔つての勢力と兩者の中、生命的社會的價值に惹かれる。正確にいへば、同類群居と衆望を擔つての勢力と兩者の中、いづれかといへば同類群居に惹かれるのが即ち衆庶である。然し、勿論衆庶と雖も衆庶なりの人格承認、社會的地位と「面子」との強い要求を懷いてゐる。且又、受動的に道德的政治、愛と指導との政治を欲してゐる。士は同類群居と衆望を擔つての勢力と兩者の中、衆望を擔つての勢力に惹かれる。正確にいへば、同類群居と衆望を擔つての勢力と兩者の中、いづれかといへば勢力に惹かれるのが即ち士である。然し、勿論士と雖も同類相呼ぶ。而して、勢力を欲するや能動的に自らが衆望を擔つて勢力を集め且之を振はうとする。要するに、士庶を通じて支那人は經濟的價值以上に生命的社會的價值と社會的政治的價值とを重んずる。經濟的價值領域よりこれ等の領域に轉轍するや、經濟的價值領域をこれ等の領域に下屬せしむるか、又は之を全く弊履の如くに扱ふ。

支那人は經濟的價值を無上至高とし、一應之にしが、みついて「これこそは離されぬ」といふ態度を取るが、窮極的には經濟的價值を超脱して生命的社會的價值領域又は社會的政治的價值領域に轉轍し、轉轍するや、經濟的價值領域をこれ等の領域に下屬せしめることもあるが、さうと限らず、時に全く之を弊履の如く抛つ。支那人の世界觀に於て經濟的價值は無上至高の地位に常住してゐないのみならず、不安定なる地位をしか保つてゐない。

支那人は、しつこく、經濟的價值を引張つておいて最後のどたん場で之を突離することがある。

上述せる所を支那人生活の實相について少しく觀て見ることにしよう。

支那人衆庶の生活を眺めるに、更に貧・富又は無産有産の二部類に分れ、大多數は無産の部類に屬する。無産の衆庶の生活を眺めるに、かれ等は營々として働き一筋の藁をも大切にし一錢一厘を爭ふ。其の勤勉と節儉と愛錢は正に徹底的である。然るに、かれ等の如き財利を渴望せるものに當然見受けらるべき筈の焦燥と卑屈の面影の認められないといふことは先づ驚くべきことである。悠々迫らずかれ等は貧窮と闘つてゐる。而も、貧窮の境涯にありながら、其の財力の及ぶ限度で生活を享樂することを控へない。諸節句はかれ等の擧げて祝ふ所であり、中秋の節ともなれば、僮僕の家もみすばらしいながらに壇を設け月餅を供へ蠟燭を點して月を祭るし、正月ともなれば、九尺二間に足らぬ文字通りの茅屋も扉に芽出度い文句の紅い春聯を貼りつけ、屋内は酒肴談笑にさざめく。日稼人の娘と雖も亦折々は翡翠の耳飾りを下げ金の指輪を嵌める。たゞ、其の翡翠は硝子玉であり、金は鍍金であるといふ丈である。若し夫、生命の發展代謝過程の社會的披露であるところの冠婚葬祭に至つては、なけなしの財産の大半を費すことを辭せない。營々として働き一筋の藁を惜しみ一錢一厘を爭つた人間とはおよそ違つた人間となつて、大盤振舞をする。勤勉も節儉も愛錢も恬として忘れたかの如くである。最も驚くべきことは、其の日／＼の暮しを考へなければならぬ境涯にありながら、出来る丈早く結婚し、出来る丈多く生み、といふよりも、生れ来るものを少しも拒まず、同族縁者をして食しい自分の卓子に存分蟬らせる、といふよりも、蟬り来るを少しも拒まない、といふ生命的社會的生活である。如何に貧しくとも、かれ等はわが血を繼い、

で生れ来るものをして存分生れ來らしめ、席を與へ、食物の分け前にあづからせる。現在の財産なり生活程度な
りを維持するがために口の殖えることを阻止しようとは考へ及ばないものの如くである。三升の飯を五人で六合
づゝ食ふよりも、六人で五合づゝ、更に、十人で三合づゝ食はうとする。いよく食へなくなつたら、其の時は
幼弱をして死なせるか、共に餓死することとして、どうにか食へる間はあるあはせのものを分け合つて食ひつな
いで行かうとする。生めよ殖えよ地に満てよとの神の託宣も、爲政者の指令もなくして、かれ等は産んで殖えて
地に満たうとする。それから又、如何にしが、ない暮しをして居ても、「本家」「親戚」の同族縁者が食ひはぐれて
寄りついて來れば、惜しみなく寄りつかせる。寄りつく方でも遠慮がちに頭を低くして寄りつくのではなく、堂
々と大きい顔して坐り込む。坐り込まれる方では悦んで——とまで行かなくとも、別に齒ることなく——客人に
寢所を供し椅子を與へる。現在の財産なり生活程度なりを維持するがために同族縁者の寄食を阻止しようとは考
へ及ばないものの如くである。月収二十圓で五人暮しのところへ二人の寄食者を迎へて七人が口過ぎしなければ
ならぬことになるも詮ない仕儀と觀じてゐる。客人のために糊口の途を講じましょうが、いよく七人では食へ
なくなつたら、其の時は客人に再び放浪の旅に出て貰ふこととして、どうにか食へる間はあるあはせのものを主
客分け合つて食ひつなうとする。更に驚くべきことには、一錢一厘を爭ふ道路商人でありながら、例へば西瓜
を、ま、い、なれば一個六十錢で賣り、十に切つてならば一片五錢で賣るといふ仕方、無差別の法則を蹂躪し、
顧客の貧富従つて購入力に應じて差別價格を附し、以て無産同類と相依共存しようとする。少數有産の衆庶の生
活はどうであらう。彼等は其の産を護り更に富を致さうと日もこれ足らぬ有様である。經濟的利害に極めて俊敏

であつて利得を捉へるに拔目なく、致富の機會を見遁さない。彼等も亦愛錢家として無産の衆庶に劣らず、金錢關係に於てかれ等到大まかとか模々糊々とかいふ趣味も風格もない。經濟人とは正しくかれ等のことをいふのではないかとさへ考へさせられる。然るに、如何に經濟人的であれ、かれ等は、非人間的に致富に精進するところのプロテスタント「資本主義精神」の禁慾的職業倫理を奉ずるものではない。かれ等は生活を享樂することを控へない。美衣美食にしてかれ等の求めざるはなく盡さざるはない。かれ等は經濟人であるよりも、以上に享樂主義者である。然るに、かれ等は享樂に没するものではなく、生命の發展代謝過程の社會的披露である所の冠婚葬祭に於てはかれ等も亦財産の多くの部分を蕩盡することを辭せない。金錢關係に於て大まかとか模々糊々とかいふ事を忘れてゐるかれ等も事冠婚葬祭といふ生命的社會的生活に於ては、別人となつて金錢上の寛仁大度を示す。「吃大戸」の民風には唯々諾々として合流する。金錢の愛すべく惜しむべきことを忘れたかの如くである。

更に又、かれ等も出来る丈早く結婚し、往々出来る丈數多く妻妾を養ひ、出来る丈多く生み、同族縁者をして自分の財産に蝟集せしめる。寄つて蝟つて食ひつぶされることを厭はないものの如くである。往々同族縁者を救済するために家業倒産を甘んずる。同族縁者の糊口のためには同族登用、因縁登用至らざるはない。裕福なる支那人衆庶の住居を訪れて老幼男女の數が餘りに多く、何れが主人で何れが主婦か辨じ難きに苦しむことは筆者だけの經驗ではあるまい。要するに、貧しきも富めるも、支那人衆庶は同血、同族、縁者乃至同類とワンサ／＼寄り合つて暮すことを無上とするとしか解しやうがない。支那人衆庶は金錢を愛し、金錢を愛する以上に享樂を求めるが、金錢よりも享樂よりも「衆」「庶」を愛し且楽しむものである。かれ等は經濟人であるよりも、享樂主

義者であるよりも、生命的社會人である。

士たる者の生活を眺めるに、士も亦貧・富又は無産有産の二部類に分れ、其の大多數は有産の部類に屬する。有産の士の生活を眺めるに、かれ等が經濟人であることは有産の衆庶と同様である。かれ等は常に俸祿の増大と安定とを念頭に置き、其の權力地位から最大の金錢的利得を擧げようとする。然るに、有産の衆庶と同様に、かれ等も亦經濟人であるよりも、以上に享樂主義者である。而かも又、享樂に没することなく、冠婚葬祭に産を傾け、出来る丈多く産み、同族縁者に寄つて蝟つて食ひつぶされることを厭はぬ。少數無産の士の生活はどうであらう。かれ等「貧士」の暮しは至つてつましやかである。かれ等は金錢の取予を苟くもしない。然し、かれ等に焦燥や卑屈の面影は聊かも認められない。貧窮に屈託せぬえもいはれぬ風格を備へてゐる。然るに、かれ等は無産の衆庶と同様に、つましい生活の中にも生活を享樂することを忘れない。少しく錢あれば酒を買ひ、醉顔を春風に吹かれつゝ楊柳の下を逍遙する。而して又、冠婚葬祭には、なけなしの財産の大半を費し、出来る丈多く生み、同族縁者をして貧しい自分の卓子に存分蝟らせる。同族登用因縁登用亦至らざるはない。畢竟、富めるも貧しきも、士も亦衆庶と同様に、同血、同類、縁者と寄つて蝟つて暮すことを無上とする。衆庶と同様に、金錢を愛し、金錢を愛する以上に享樂を求めるが、金錢よりも享樂よりも「衆」「庶」を愛し且樂しむ。士が經濟人であるよりも、享樂主義者であるよりも、生命的社會人であること、衆庶と何等かはりはしない。然るに、士は生命的社會的生活を愛すればとて、之を無上とし之に安住し之に没するものではない。衆庶は生命的社會的生活に安住し之に停滯するのに、士は更に別の生活を求める。それは、學問に志して以て徳を成し、以て衆望を集

め、衆望を擔つて勢力を振ふ生活である。言ひ換へれば、有徳の治者となることである。而して、此の社會的政治的生活に入るや、往々俸祿も金錢的利得も致富も忘却し、美衣美食の享樂を抛ち、天晴禁慾家として舉措し、學問に没頭し天下社稷に殉ずる。即ち、或は敝衣破帽、陋巷に讀書三昧の日を送り、又は都塵を避けて晴耕雨讀倦むことなき老儒の生活にひそみ、或は酒を斷ち茶を斷ち、中山服を身に纏うて夙夜國事に奔走して安らふことなき將領國士の生活に投ずる。然しながら、士は有徳の治者の生活にも徹するものではない。社會的政治的生活に終始しようとするものではない。明哲保身を心得てゐる。時あつて官を退き野に光風清月を友として暮すことを忘れない。それは再び官途に就いて更に大いに力を振はんがための「轉轍」であることもあるが、其れよりも寧ろ常住把持する所の心構へである。保身は即ち生命的經濟的及び社會的生活の複合である。而もこれらの生活の積極的發展を求めず、只管消極的維持を目指し、「長久」即ち「細く長く」を念ずるものである。一途に經濟的福祉を追求し、致富に精進する經濟人の生活ではない。

轉じて、支那事變を繞る支那人の態度を觀てみよう。かの日支折衝がもの分れとなつた節、未だ必ずしも支那側が對日戦争に趨らなければならぬ何等合理的必然性はなかつたに拘らず、蔣介石政權は對日戦争を決意し、蔣介石は勿論、何人も、日本と戦へば間違つても勝つ見込はないといふことを悟らないもなく、必ずや支那が敗北して徒らに民生を損ふ結果となること、假に「最後の勝利」を得るとしても對日長期抗戰の爲に焦土戰術、ゲリラ戰術を行ふことに依つて支那が失ふべき民生と「最後の勝利」實は日・支兩虎共に倒るることを合理的に商量すれば、失ふべき所の遙かに大なることを承知しながら、みすく對日戦争に趨り、恃むべからざる第三國の援

蔣行爲を悼みに抗戦を繼續し、「國亡びて赤色ゲリラ有り」、抗戦建國を倡へつゝ抗戦亡國に向つて邁進しつゝある。かくの如きは民生即ち民族の生命的經濟的生活を眞に尊重するものの出来ることではない。部分的合理性に行き過ぎて却つて非合理性に墮し、一時的にせよ、對內的自己政權の維持とか對日憎惡とかを重しとし民生を輕しとし之をかかるものの前に弊履の如く扱ふか、さもなくばヒステリー發作風に、「飲鳩止喝」若くは「吃了砒酸死了老虎」と叫んでやぶれかぶれに一切を無價值とし、勿論民生を無價值と觀する虛無主義的態度に依つて、はじめて出来ることである。經濟人には到底不可能な事である。

事變下、占領地域の宣撫工作と經濟建設に於て、住民が生活を奪はれ毀たれることを怖れ嫌ふことはいふまでもなきことながら、徒らに恵み施され恒なく與へられるよりも取予與奪恒あり信あるを悦び、よかれあしかれ、抛置され委ねられることを欲し、従つて安居樂業政策にしても經濟的福祉の増進を以て萬事とする様なやり方よりも貧しいながらに掻きまはされることなく居に安んぜしめて貰ふことを願ひ、儲け大なるも不安なる（とかれ等の感ずる）交易作物——棉花——を栽培せんよりも、どうにか暮して行くための自給作物——小麥——を植ゑんことに執心する有様は誠に印象的である。

嘉興の西南方にある桐郷といふ縣城で次の様な事が現地で實際仕事をしてゐる人に依つて體驗せられたと或る雜誌の昭和十七年二月號に報ぜられてゐる。半ば隨筆的ではあるが、支那人生活の眞諦に觸れてゐる様に思はれる。

桐郷縣地方に幾つかの支那人經營の植物油工場があるところ、其の工場は概して設備が舊式で、搾り粕に尙十二三パーセントの
貧民生活及び思想

トから二十七・八パーセントの油が残つてゐるのを見つけた或る日本人は、嘉興附近に製油工場を創めて、支那人工場から其の搾り粕を買ひ受け、三パーセント程度まで搾り、其の粕を支那人工場を通じて農家に賣渡すこととすれば、遺利を収め資源を生かすことになるのみならず、搾り粕の肥料としての純度を高めることとなり、願つてもないことと考へて、其の人は支那人工場に當つて見たが、一軒として色よい返事をするものがなかつた。或る一つの工場では、百人に近い従業員が驚くべき舊式な機械設備の傍で立働いてゐるのが見受けられ、其のうち糶吹きの一入の男は糶の一部分になり切つて精妙に働いてゐるのだが、其の右手は筋肉隆々として左手と均衡を失つて居り、しかもひどいせむしに見えた。主人の説明に依れば、此の男は三十年も糶を吹いてゐる工場一の熟練工であつた。三十年の精勵と努力とに依つて最も仕事に適した體になり得たのであつて、決して不具者でもせむしでもないのだとのこと。而して、直接其の男に心境を聴けば、糶吹きとして雇はれた自分である、三十年間一度も過ちをせぬのに、何で糶吹きをやめて他の仕事をせねばならぬのか、といふのが其の答へであつた。問題の搾油率と搾り粕のことに就いて主人の見解は左の如くであつた。一、舊式の機械をやめて新式の機械に依ると、僅々三、四ヶ月でこの附近の一年分の原料は盡されてしまふ、其の後の八九ヶ月は職工を失職さすわけに行かないから、雇ひ切りにして遊ばしておかうとするに、それでは職工達は喜ばず、遠慮したり辭退したりするだらう、父祖代々此の工場に働いて來たものを路頭に迷はせたり遠慮氣兼ねをさせたりする事は出来ぬから、新式の機械を入れる譯には行かぬ。二、搾油率を高め残油を減少する事の利益については、儲かるのはよい事だが、今でも決して損をしてゐる譯ではないから、搾油率を高め度いと考へない。三、父祖から工場を渡される時に農民と職工との生活を保障する様に、利益も昔のまゝ維持する様に申渡されてゐる。戦争とか不作其他の災害の場合は、農民の代表が來て種子や肥料代或は糧米の資を借り受けて行く、父祖以來彼等から原料の供給を受けてゐる恩義によつて、能ふ限り救済もし貸付けもして今日に至つた。申し出の如くにすれば、搾り粕を賣つた金はそれだけの率に従つて分配されねばならないし、肥料とする搾り粕の量が幾分減るし、取扱ひ方も變つて來るし、肥料としての質が變るため作物に甚しい影響でもあると申譯ないし、ともかく恩義ある農民達に影響する所重大なるが故に、農民とよく相談し、取扱方を研究した上でなければ、話に應ぜられぬ。とのことであつたといふ。

かうした支那人の經濟生活は貧民生活と稱して最も至富であり、經濟を繞る彼の世界觀をもとむれば、それは貧民的世界觀と言ふの外はないであらう。支那人經濟精神の根柢は貧民精神である。其の「貧民」といふのは

「貧ヲ樂シム」のではない。貧そのものに價值を見出すのではなくして、「貧ニシテ樂シム」のであり、「貧シクトモ樂シム」のである。樂しむ對象は別に存する。それは士と衆庶とにありて異り、衆庶にありては生命的社會的生活即ち同類群居、言ひ換へれば、「衆」「庶」そのことであり、士にありては一應は同様に生命的社會的生活であるが、更に進んで、社會的政治的生活即ち衆望を擔つての勢力、言ひ換へれば、有徳の治者たることである。たゞ、其の有徳の治者たるや常に保身即ち生命的經濟的社會的消極生活に遁げ込む心構へを持する有徳の治者である。庶民にありては生命的社會的生活が其の「道」であり、士にありては社會的政治的生活が其の「道」であるとするならば、「貧樂」は士庶何れにありても「貧ニシテ道ヲ樂シム」のであり、「貧シクトモ道ヲ樂シム」のである。

更に立入つて觀るとき、支那人にとりては窮極的には一切が無價值である、經濟的價值も亦他の諸價值と共に支那人にとつて窮極的には無價值である。此の境地に追ひ詰められた時の支那人にとりて物的福祉に薄いといふこと即ち貧は何等苦ではない。此の意味でも支那人の世界觀は奥底深く貧樂的である。こゝまで立入る前にすでに右の意味に於て支那人の世界觀は貧樂的である。

貧樂精神の持主である支那人は決して貧を愛し富を惡むものではなく、矢張富を愛し貧を惡むものである。然し、彼が富を愛し貧を惡むのも一應のことであつて、結局は貧富を超越する。富可なり、富得られずんば貧も亦可なりといふのが其の眞面目である。暮しはどうでもよいといふのではないが、どうにか暮して行ければそれで宜しいといふのが彼の心底である。支那人を經濟人と見做し、喰はすに利を以てすれば則ち跟いて來る人間であ

とする支那人觀ほど由々しき謬見は存しないであらう。

二 曾國藩の貧樂思想

現代支那人の貧樂生活と貧樂精神は必然的に貧樂思想といふ觀念形態を伴つてゐる。士の層にはいふまでもなく、庶民層にも貧樂思想が見えてゐる。勿論かの曾國藩の如き高位の士にも貧樂思想が見えてゐる。曾國藩は、人も知る如く、清朝中興の元勳である。國華、國荃、國葆等の弟と李鴻章、左宗棠等を率ゐて髮賊を平定して以て清朝を安んじ、李・左の外張之洞、梁士詒、張謇、盛宣懷等の大先達として支那近代經濟建設の嶮路に巨歩を印した人である。學の人であり、徳の人であり、學徳の人であるのみならず、且又事功の人である。今日傳をなすもの、「曾滌生先生の爲人言行、現在にありても、忠君の一項を除いては、すべて以て我等の準則となすべきに似たり」と其の人格を讃仰してゐる。²⁾曾國藩こそは清末より今日にかけての蓋世の大人格である。彼の精神こそは正に此の時代の支那民族の精神である。彼に見える貧樂思想を以て現代支那の貧樂思想と見做すは決して牽強附會ではあるまい。

國藩は軍旅匆忙の間、絶えず家人に書翰を送り、父母を安んじ子弟を戒しめてゐるが、其の數多くの書翰中に左の如き言葉が見えてゐる。³⁾

咸豐六年九月二十九日江西撫州門外から息紀鴻に

凡人多望子孫爲大官、余不願爲大官、但願爲讀書明理之君子。勤儉自持、習勞習苦、可以處樂、可以處約、此君子也。余服

2) 曾國藩家書六種、陶樂勤序。蔣星德編著「曾國藩之生平及事業」編者敘言。

3) 曾國藩家書六種(四)家訓。

官二十年，不敢稍染官宦氣習，飲食起居，尚守寒素家風。極儉也可，略豐也可，太豐則我不敢也。凡仕宦之家，由儉入奢易，由奢返儉難。爾年尚幼，一切不可貪愛奢華，不可慣習懶惰。無論大家小家，士農工商，勤苦儉約，未有不興。驕奢倦怠，未有不敗。

咸豐十年閏三月四日息紀澤に

昔吾祖星岡公，最講治家之法，第一要起早，第二要打掃潔淨，第三誠修祭祀，第四善待親族有鄰里……此四事之外，於讀書種菜等事，尤爲刻刻留心。故寫家信，常常提及「書蔬魚豬」四端者，蓋祖父相傳之家法也。

同年十月十六日紀澤紀鴻兩人に

銀錢田產，最易長驕氣惰氣，我家中斷不可積錢，斷不可買田，爾兄弟努力讀書，決不怕沒飯吃……。

咸豐十一年三月十三日紀澤紀鴻に

吾祖星岡公之教人，則有八字，三不信。八者曰：考、寶、早、掃、書、蔬、魚、豬，三者，曰僧巫、曰地仙、曰醫藥，皆不信也。

同年四月四日安徽省東流縣から紀澤に

鄉間早起之家，蔬菜茂盛之家，類多興旺。早起無蔬之家，類多衰弱，爾可於省城菜園中，用重價雇人至家種蔬，或二人亦可。其價若干，余由營中寄回。

同年八月二十四日紀澤に

居家之道，惟「崇儉」可以長久。處亂世尤以「戒奢侈」爲要義。衣服不宜多製。尤不宜大鑲大緣，過於綢爛。爾教諸導妹，敬聽父訓，自有可久之理。

同治元年五月二十四日紀澤に

大約世家子弟，錢不可多，衣不可多。事雖至小，所關頗大。

同年同月二十七日紀鴻に

凡世家子弟，衣食起居，無一不與寒士相同，庶可以成大器。若沾染富貴氣習，則難望有成。吾忝爲將相，而所有衣服，不值三百金。願爾等常守此儉樸之風，亦惜福之道也。其照例應用之錢，不可過節。

同治二年七月十二日叔父丹閣（十叔）に

自以非材，久竊高位，兢兢慄慄，惟是不貪安逸，不圖豐豫，以是報聖主之厚恩，卽以是稍惜祖家之餘澤。

同年十二月十四日姪紀端に

吾家累世以來、孝弟勤儉。……竟希公星岡公、皆未明即起、竟日無片刻暇逸。竟希公少時、……正月上學、輔臣公給錢一百、爲零用之需、五月歸時、僅用去三文、尙餘九十八文還其父、其儉如此。星岡公、當孫（國藩自身）入翰林之後、猶親自種菜收蔬。吾父竹亭公之勤儉、則爾等所及見也。今家中境地、雖漸寬裕、姪與諸昆弟、切不可忘卻先世之艱難、有福不可享盡、有勢不可使盡。勤字工夫、第一貴早起、第二貴有恒。儉字工夫、第一莫著華麗衣服、第二莫多用僕婢雇工。

同治四年閏五月九日紀澤紀鴻に

爾等奉母在寓、總以勤儉二字自惕、而接物出以謙慎。凡世家之不勤不儉者、驗之於內行而華露。余在家深以婦女之奢逸爲慮。

同年同月十九日清江浦から紀澤に

寓中絕不酬應、計每月用錢若干、兒婦諸女、果每日紡績有常課否、下次稟復。吾近夜飯不用葷菜、以肉湯沌蔬菜一二種、令極爛如糯、味美無比、必可以資培養。（菜不必費、適口則足養人）試沌爾母食之。（星岡公好於日入時、手摘鮮雞、以供夜餐。吾當時侍食、實覺津津有味。今則加以肉湯、而味尙不逮於昔時。）後整則夜飯不葷、專食蔬而不用肉湯、亦養生之宜、崇儉之道也。

同年九月一日紀澤に

吾於凡事皆守「盡其在我、聽其在天」二語。即養身之道亦然。體強者如富人、因戒奢而益富。體弱者如貧人、因節儉自全。節儉、非獨食色之性也。

同治五年八月三日紀澤紀鴻に

吾家婦女、須講究作小菜、如腐乳、醬油、醬菜、好醋、倒筍之類、常常做些、寄與我吃。

同年十二月一日歐陽夫人に

家中遇祭酒菜、必須夫人率婦女親自經手。祭祀之器皿、另作一箱收之、平日不可動用。內而紡績做小菜、外而蔬菜養魚、款待人客、夫人均須留心。吾夫婦居心行事、各房及子孫皆依以爲榜樣、不可不勞苦、不可不謹慎。近在京買參、每兩去銀廿五金、不知好否、茲寄一兩與夫人服之。

同年十二月二十三日紀澤に

余近作書箱大小、……出門則以繩絡之而可挑、在家則以架乘之而可累。……開前倉板則可作櫃、再開後倉板則可過風。

當作一小者送回、以爲式樣。吾縣本作最好而賤、爾可照樣作數十箱、每箱不過費錢數百文。讀書乃寒士本業、切不可有官家風味。吾於書籍及文房器具、但求爲寒士所能備者、不求珍異也。家中……、一切須存此意。莫作代代做官之想、須作代代做士民之想。門外但挂「宮太保第」一匾而已。

同治六年五月五日歐陽夫人に

夫人率兒婦輩在家、事事須立個一定章程、作官不過偶然之事、居家乃是長久之計。能從勤儉耕讀上做出好規模、雖一旦罷官、尚不失爲興旺氣象。若貪圖衙門之熱鬧、不立家鄉之基業、則罷官之後、便覺氣象蕭索。凡有盛必有衰、不可不預爲之計。望夫人教訓子孫婦女、常常作家中無官之想、時時有謙恭省儉之意、則福澤悠久、余心大慰矣。

同治九年六月四日佛人迫害事件を查辦すべく天津に赴かんとする時紀澤紀鴻に

歷覽有國有家之興、皆由克勤克儉所致。其衰也則反是。余生平亦頗以勤字自勵、而實不能勤。……生平亦好以儉字教人、而自問實不能儉。今署中內外服役之人、寄房日用之數、亦云奢矣。其故由於前在軍營、規模宏闊、相沿未改。近因多病、醫藥之資、漫無限制。由儉入奢、易於下水。由奢反儉、難於登天。在兩江交卸時、尙存養廉二萬金、在余初意、不料有此。然似此放手用去、轉瞬即已立盡。爾輩以後居家、須學陸稼山之法、每月用銀若干兩、限一成數、另封秤出。本月用畢、只准贏餘、不准贏欠。衙門奢侈之習、不能不澈底痛改。余初帶兵之時、立志不取軍營之錢、以自肥其私。今日差幸、不負始願。然亦不願子孫過於貧困、低顏求人。惟在爾輩力崇儉德、善持其後而已。

知足天地寬、貪得宇宙隘。……

日課四條、……四曰、習勞則神欽。凡人之情、莫不好逸而惡勞。無論貴賤智愚老少、皆貪於逸而憚於勞、古今之所同也。人一日所着之衣、所進之食、與一日所行之事、所用之方相稱、則勞人肆之、鬼神許之、以爲彼自食其力也。若農夫織婦、終歲勤動、以成數石之粟、數尺之布。而富貴之家、終歲逸樂、不管一粟、而食必珍羞、衣必錦繡、酣豢高眠、一呼百諾、此天下最不平之事、鬼神所不許也。其能久乎。……故勤則壽、逸則夭。勤則有務而見用、逸則無能而見棄。勤則博濟斯民、而神祇欽仰。逸則無補於人、而神鬼不歆。是以君子欲爲人神所憑依、莫大於習勞也。

右國藩が家人に致した言葉を通讀するに、「勤儉耕讀」以て「居家長久之計」を立てよといふに歸する。凡そ東洋人にして家人を訓ふるに驕奢瀆意を獎めるものはないであらう。身持を戒めて勤儉を説かざるはないであら

4) 同治七年四月の日記にも「余好以儉字教人、而自家實不能儉。傍夕與紀澤談、令其將銀錢賬目自行經理、講究儉約之法。」と見えてゐる。曾國藩家書六種(五)日記。

ろ。とりわけ、小身より起つて大身となり將相となる者にして、其の小身の時代を忘れず、子弟に勤儉を口説かざるはないであらう。依つて、國藩のかゝる家訓は東洋人にとりては何等異とするに足らず、特にあげつらふに當らぬかの様に觀ぜられる。然し、さう觀ぜられるのは一應のことである。一見さう思はれるだけであつて、精しく之を味讀する時、さうした平盤に没すべからざるものあることに氣づくであらう。

上記の國藩の「勤儉耕讀」の家訓は前後必ずしも矛盾なしとは稱し難いが、一貫性なきまゝに之を一つの體系的なものに統一づけてみることを試みるならば、左の如くである。

人生れて官となり、大官となることが望ましい。大官となれば「寛裕」な暮しが出来るのみならず、富を積み、驕奢な生活をすることも出来る。然し、官となるよりも「讀書明理」、「勤儉自持、習勞習苦」以て樂に處るべき君子たることが願はしい。官となり「將相」となつても、私腹を肥やし富を積んではならず、どうにか豊かに暮すことが出来、子孫が貧困に過ぎなければよいとしなければならぬ。錢を積み田を買つてはならず、生計のことを氣にかけるべきものではない。官家の風に染み、驕奢懶惰に流れず、讀書を本業とする寒士の心構へを以て勤儉を旨としなければならぬ。欲を節し足るを知らなければならぬ。家人も代々官とならうなどと考へず、代々「士民」たらんと心懸け、官に有つても無官の心構へでゐなければならぬ。儉の徳を崇めて、「善く其の後を持する」ことを力めなければならぬ。勤儉と共に讀書は勿論之を怠らず、早起、清掃、祭祀、應對、紡績、總菜作り等の家事を家人自ら治め、家計收支を正し、更に蔬菜魚猪を自給出来る様に耕種に精を出さなければならぬ。結局、「勤儉耕讀」を生活の規準としなければならぬ。蓋し、儉より奢に入るは易いけれども、奢より儉に返るは難く、銀錢田産の富があれば驕情の氣を生じ易く、勤儉なれば必ずや「興る」が、驕奢懶惰なれば必ずや「敗れる」からである。勤なれば材ありとして用ひらるし、逸なれば能無しとして棄てられるからである。儉なること寒士と同様ならば、「大器と成る」ことが出来るが、官家富貴の風に染みて驕奢に流るれば「成る有る」を望み難いからである。早起して野菜を作る家は榮えるからである。それだけではなく、安逸を貪らず豐豫を圖らざる勤儉は聖主の厚恩に報いる所以であり、祖宗の餘澤を惜しむ所以であるからである。更に又、儉は「福を惜しむ」の道であり、福あらばこれを享樂し盡すべきものでないからであ

る。儉なれば「福澤悠久」なるを得るからである。抑々、官となり大官となることは偶然の事に過ぎず、「居家」こそが「長久之計」であり、儉を崇めてこそ「居家」「長久」なるを得るからである。「勤儉耕讀」を生活の規準として居れば、一旦官を罷めても「興旺の氣象」を失はざるを得るからである。盛者必衰の理に備へて、官を罷めた場合「氣象蕭索」を覺えない様に豫ねて「勤儉耕讀」を心懸けなければならぬ。尤も、蔬菜を自給し菜食するのは「養生之宜」でもある。最後に又、一方に農夫織婦の終歲勤勞するものあるに驕奢懶惰でゐるといふことは所得と貢獻との不均衡を犯すもので神人共に許さざる所だからである。要するに、一つには、興らんがため、用ゐられんがため、大器とならんがため、家榮えんがため、——官となり大官とならんがため——に、二つには、聖主、祖宗への報恩のために、三つには、「福を惜しむ」ため、「福澤悠久」のため、「居家長久之計」として、即ち官を罷め野に下つても慌てることなく意氣軒昂である様に、將又「生を養ふ」ため——畢竟、「保身」のため、細く長く暮すために、更に四つには、世の中から享ける所得と擡げる貢獻との均衡を期するために、「勤儉耕讀」を生活の基準としなければならぬ。尤も、儉を重んずべきなればとて、祭祀は誠修し、親族隣里には善くし、客人は款待すべきであり、金錢支出は尚に過ぎぬ様にしなければならぬ。

此の思想は上述の現代支那人特に士の貧樂生活及び精神と殆んど接を一にするものである。吾々は何等躊躇する所なく曾國藩の私的經濟生活に關する思想は貧樂思想であるといふことが出来る。ただ國藩の思想は「貧ニシテ樂シムベシ」との道德的思想であつて「貧ニシテ樂シム」所の世界觀的な貧樂精神とは距たる所がある。けれども、右國藩の思想には「儉より奢に入るは易く、奢より儉に戻るは難し」、「驕る者久しからず」等の經驗的法則も織込まれてゐるし、富を學や官や「居家長久」や「養生」と並べて富高からずとする經濟的福祉に對する根本的な評價態度が根柢をなしてゐる。國藩の貧樂思想も經濟を繞る一定の世界觀の上に立つてゐる。上述の現代支那人の貧樂生活及び精神に正しく對應するものである。

三 貧樂思想の源流

現代支那人の貧樂精神にせよ、其の昇華たる會國藩の貧樂思想にせよ、忽然として前清末期に現れ來つたものではない。既に古代思想に其の源流が見られる。而も、餘りにも相似たる、殆んど其のまゝの姿で古代思想の中に見えてゐるのに驚かざるを得ない。

貧樂に對して全く對蹠的なる思想、いはゞ「富樂」思想も古代支那思想に存しないではなかつた。司馬遷の思想にそれがはつきり見えてゐる。彼は先づ、獨り農工商賈と言はず、賢人が政治に携はつて信節を死守し、處士が名高からむとするのも、歸する所富厚を得んがため、吏が廉なるも、賈が廉なるも富のため、壯士が軍に在つて勇戰奮闘、水火の難を厭はざるも重賞にあづからんがため、閭巷の少年の惡事も任侠の振舞も財利のため、遊女の舞樂艷姿も富厚を得んがため、游閑の公子の盛裝豪遊も富貴のため、獵人の勇猛、博徒の勝負争ひも財利のため、醫者が技能を盡し、小役人が法を濫り文書を偽造するのも金のため、すべて財富のために知能を傾け盡さざるはない。「富ハ人ノ情性ニシテ、擧バズシテ俱ニ欲スル所ノ者ナリ」とて、人間は本能的に富を欲するものなりとする。而して、「貧富ノ道之レ奪予スル莫シ。而シテ巧者ハ餘有リ、拙者ハ足ラズ」、「富ハ經業無ク、則チ貨ハ常主無シ。能者輻湊シ、不肖者瓦解ス。千金之家ハ一都ノ君ニ比シ、巨萬ナル者ハ乃チ王者ト樂ヲ同ジウス。」とて、個人の能力の優劣に依つて貧富の懸隔必然的に生じ、能力優れて富者たることは王侯に比すべきものとして富者を尊崇し、「夫レ千乘之王、萬家之侯、百室之君、尙貧ヲ思フル有リ。況ンヤ匹夫編戶之民ヲヤ」とて、貧

は切に避くべく富は切に求むべきものとしてゐる。更に道德的に觀ても、「倉廩實テ禮節ヲ知り、衣食足テ榮辱ヲ知ル。禮ハ有ニ生ジテ無ニ廢ル。故ニ君子富メバ好シデ其ノ徳ヲ行ヒ、小人富メバ以テ其ノ力ニ適フ。淵深クシテ魚之ニ生ジ、山深クシテ獸之ニ往キ、人富デ仁義附ス」と謂ひ、「巖處奇士ノ行モナク、長ク貧賤ニシテ、好シデ仁義ヲ語ル、亦羞ヅルニ足ル」と謂つて、富を高しとし、之を至高とはせずとも、道德への必須の先行條件なりとなす。此の司馬遷の思想は「富ヲ樂シム」か「富ミテ樂シム」ものである。正しく「富樂」思想と呼ぶに値ひする。此の「富樂」思想が太史公の本意に發するものであつたに拘らず、支那に於て其の後學者の間に全然認せられず、何人からも祖述せられることなくして今日に至つてゐることは考ふべきことである。⁵⁾

儒家特に論語に見えてゐる思想は全く異なる。論語に見えてゐる所に從つて窺ふに、儒家は君子といふ人間型を理想とする。君子の生活が儒家の理想生活であり、君子の經濟生活が儒家の理想とする經濟生活である。君子の經濟生活如何といふに、抑々君子の生活に於て最も高い價值を有するものは學問道德であつて、生活の物的福祉はさして價值高きものではない。「君子ハ食飽カムコトヲ求ムル無ク、居安カラムコトヲ求ムル無ク」、「士道ニ志シテ、惡衣惡食ヲ耻ヅル者ハ、未ダ與ニ議ルニ足ラズ」とし、「驕樂ヲ樂シミ、佚遊ヲ樂シミ、宴樂ヲ樂シムハ損ナリ」、「約ヲ以テ之ヲ失フ者ハ鮮シ」として、安居を求めず衣食の美を追はず、一切の贅澤を斥け、儉約を旨とする。君子たるもの、禮は之を重んずるけれども、「禮ハ其ノ奢ラムヨリハ寧ロ儉ナレ」又「麻冕ハ禮ナリ、今ヤ純ハ儉ナリ、吾衆ニ從ハム」とて、禮に於てさへ質素を重んじ大衆的ならんとする。かうして、君子たるもの極力驕奢を斥け儉約を重んずるけれども、吝嗇では決してなく、「惠ナレバ則チ以テ人ヲ使フニ足ル」とし、

5) 岩波講座，東洋思潮 III，小島祐馬稿「社會經濟思想」，108。

「願ハクバ車馬衣輕裘ヲ、朋友ト共ニシテ之ヲ敝ルモ、憾ム無カラム」とて、朋輩との共同消費を希望するし、
 「飲食ヲ菲クシテ、孝ヲ鬼神ニ致シ、衣服ヲ惡シクシテ、美ヲ黻冕ニ致ス。宮室ヲ卑シウシテ、力ヲ溝洫ニ盡ス」
 を理想とするものである。君子は物的福祉をさして價值高きものではないとして儉約を重んずるけれども、財富
 を無價值のものとも、顧みるに足らぬ低價值のものとも、乃至反價值とも認めるものではなく、財利を追はない
 ではなく、致富を心懸けないではない。「邦道有リテ貧且賤ナルハ恥ナリ」とて世の中に道德が行はれてゐるのに
 わが身獨り貧賤であることは恥づべきこととする。たゞ、飽くまで富裕の價值を道德の下位に置いて、第一に
 は、飽くなき致富を謹しみ、蓄財に節度を守り、經濟的打算に趨かない。第二には、道德に反する財利を斥け、
 「不義ニシテ富ミ且貴キハ我ニ於テ浮ベル雲ノ如シ」とて不義の富を侮蔑し、「邦道無クシテ富且貴キハ恥ナリ」
 とて、世の中に道德が行はれてゐないのにわが身の富みてあらんことを恥とする。又、「富メルト貴キトハ、是
 レ人ノ欲スル所ナルモ、其ノ道ヲ以テセザレバ、之ヲ得ルモ處ラザルナリ。貧シキト賤シキトハ是レ人ノ惡ム所
 ナルモ、其ノ道ヲ以テセザレバ、之ヲ得ルモ、去ラザルナリ」。「得ルヲ見テハ義ヲ思フ」、「義アリテ然ル後ニ取
 ル、人其ノ取ルヲ厭ハザルナリ」とて所得をすべて道義の制約の下に置く。第三には、「未ダ貧シクシテ樂シミ、
 富ミテ禮ヲ好ム者ニハ若カザルナリ」とて、富むも富の中に没せず、進んで道德を好み禮を行はずに居らない。
 更に、根本的には儒家の世界觀たる天命觀に基づいて、財富を追求しないではないが、無理して財富を積まうとは
 考へない。即ち、「死生命有リ、富貴天ニ在リ」として「富ニシテ求ムベクンバ、執鞭ノ士ト雖モ、吾亦之ヲ爲
 サム、若シ求ムベカラズンバ、吾ガ好ム所ニ從ハム」とする。かうして財富になにがしかの價值を認めつゝも、

之を最高である所の學問道德の下位に置き、且貧富を天命なりと觀することゝ依つて、君子は貧富を超越する。富めるは可なり、貧しきも亦可なり、といふ心境に住してゐる。貧苦をさして、いみじきものと覺えぬのであるから、君子にとりて「富ミテ驕無キハ易ク」、「貧シクシテ諂フコト無ク、富ミテ驕ルコト無キ」は勿論であり、貧しくとも富貴なる者を羨み怨むといふ様なこともあり得ない。貧困にゐても心安らかなれば、平然として久しく之に堪へ忍ぶことが出来、裕福な生活に居ても驕奢に流れることがないから、久しく之を持續することが出来る。「一簞ノ食、一瓢ノ飲、陋巷ニ在リ」、「疏食ヲ飯ヒ、水ヲ飲ミ、肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トスルモ」道を樂しむ樂しみを見出すことが出来、「道ヲ愛ヘテ貧ヲ愛ヘズ」、従つて、貧故に心の亂れるといふこともなく、貧を疾んで勇を恃み、亂をなす様なこともない。財富の價値を低劣なものとしか觀ないから、之を誇示することもなく、贅澤に走ることがない。他人に誇示されても、涙を吞む思ひをすることもなく苦悶することもない。贅澤の君子に於けるや正に「猫に小判」である。されば、禮に適ふも贅澤なる麻冕を廢して、衆に従つて儉なる「純」の冕を頂き、「敝レタル縕袍ヲ衣、狐貉ヲ衣ル者ト立チテ恥ヂザル」は易々たることである。

かゝる君子の生活は正しく貧樂生活である。其の「貧樂」は「貧ヲ樂シム」のではなく「貧ニシテ樂シム」又は「貧シクトモ樂シム」のであり、「貧ニシテ道ヲ樂シム」即ち貧の中に學問道德を樂しむのである。而して、富を道德生活に入る條件としないと共に、富を以て道德生活に入る邪魔とし貧を以て道德生活に入る徑路とするものでもない。従つて、最高の、こよなく、樂しき學問道德生活に入る前提として貧を樂しむのではない。學問道德を高しとし財富を低しとし、而も學問道德と貧富とを切り離すことに依つて、貧富を超越し貧富に煩はされるこ

となしに學問道德を楽しむのである。

論語に見えてゐる限りでは、君子のかゝる貧樂生活が儒家の理想とする經濟生活である。儒家の經濟思想の根柢はかうした貧樂思想である。

尙、君子の經濟生活即ち論語に見ゆる儒家の貧樂思想には見遁し難い諸多の面が存する。第一、君子は貧富を超越し、經濟的打算に趨かないからといつて、經濟生活は模々糊々で宜しいとなすものではない。經濟に或る高さの價值を認めるものである以上、之を合理化することを怠るものではない。道德に適つた財利を追求し、義にして富を致さんとすることは上述の如くであり、かの節儉も君子經濟生活合理化の一端である。更に「取與」の關係の確立を心懸け、施すにも常に施すべき筋合ひに施し、無理才覺してまで人に與へることをせず、取るべきを嚴に取り與ふべきを嚴に與へる。第二、君子は其の生計の基礎として「俸祿」なる勤勞所得の確保に力める。

「俸祿」を確保すべく、どこにでも出かけて仕官する。「九夷」の「陋」なるを厭はず、「焉」能ク繋リテ食キラレザラム」との心構へを持つる。たゞ、飽くまで道德を高きに置き「俸祿」を低きに置くものであつて、「俸祿」目標を指さず、學德に依つて自ら仕官の道の開ける様に心懸け、仕ふるや道德を行ふことを第一とし、道德が行はれなければ潔く退く。第三、君子は四六時中學問に心を勞し、至つて勤勉なるは素より、若し其の身少賤なれば「鄙事ニ多能」を發揮し、年若い間、又は貧賤な境涯に在れば、經濟技術にも長じ、なりは、ひの事に多能多藝を發揮するし、應待掃洒の家事にいそむし、又貧賤な境涯にあつて餘儀なくば、漁撈狩獵の事も之をしないではなく、孝養の爲又は祭祀の爲とあらば家族生活の必要から之を悦んでする。貧賤な境涯になくとも、「事有レバ

弟子其ノ勞ニ服シ、酒食有レバ先生ニ饌フル」ことを力める。即ち、家族内の生活では決して勞務奉仕を厭ふものではない。第四、君子は、一人に備はらんことを求めず、其の親を施てず、以ゐられざるを怨みしめず、故舊大故無ければ則ち棄てない。即ち、同族登用因縁登用至らざるはない。

叙上の全貌に於て儒家の貧樂思想を眺め、かの現代支那人特に士の貧樂精神と曾國藩の貧樂思想をふりかへる時、源流が僅かなる加除の外殆んど其の儘のいぶきを後代に保ててゐることを見出す。一に「勤儉耕讀」が之を貫いてゐる。

論語の貧樂思想と現代支那人衆庶の貧樂精神との間の隔たりについて一顧を要することがある。論語が士大夫の思想である以上此の隔たりは當然なことであるが、かの庶富教の問答に、「庶イ哉……既ニ庶シ。又何ヲカ加ヘム。……之ヲ富マシム。……既ニ富メリ。又何ヲカ加ヘム。……之ヲ教ヘム。」とあることに就いて、孔子が其の經濟政治思想に於て衆庶を愛し、衆庶の喜びを喜びとするものである以上、衆庶自らが、先づ庶からんことを欲し、庶くなりたる上に於て富まんことを欲したるものと立入つて理解することはさして無理ではないであらう。さう理解することを許さるれば、現代支那人衆庶が其の貧樂精神に於て財利よりも「衆」「庶」を愛し且樂しむ心の源流が實に論語の儒家思想に見えてゐるといふことが出来る。